

甲斐市立双葉中学校 自己評価書

令和8年1月9日（金）作成

校長 「加藤 忍」 記述者 職名（教務主任）「田中 誠」

学校教育目標 「主体的に学び、心身ともに健やかで、人間性豊かな生徒の育成」

学校経営方針

- ・全教職員で、生徒・保護者との信頼関係の下に、生徒や地域の実態を考慮して、活力に充ちた特色ある明るい学校づくりに努める。
- ・学校教育目標「主体的に学び、心身ともに健やかで、人間性豊かな生徒の育成」の具現化に向け、特色ある教育課程の編成と実施に努める。
- ・基礎的・基本的内容の指導の徹底と、定着を図る授業づくりを進める。
- ・知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育てていく。
- ・自らの個性・特性を理解し、主体的に進路選択ができる能力を育てる。また、発達段階に応じた体系的なキャリア教育の推進を図る。
- ・教育活動全体を通して、知・情・意・体の調和のとれた人間性を養い、道徳的実践力と思いやりの心を持った生徒の育成を目指す。
- ・健康安全に関する理解を深め、基本的生活習慣を身につけるとともに、文化・スポーツ等に親しみ、自ら心身の健康を高める生徒の育成に努める。
- ・職員の能力・特性を活かし、協働体制による活力ある学校運営を行う。

（1）豊かな心の育成

- ① 教育活動全体を通して、校訓「至誠」を大切にし、思いやりの心やお互いを尊重する態度を育成する。
- ② 本校の宝である「至誠の鐘」、「日本一の玄関」、「ロッカーの整理整頓」、「朝読書」等の取り組みを継続、発展させ、学校への愛着や誇りを醸成する。
- ③ あいさつは人間関係（コミュニケーション）づくりの第一歩であり、社会人としての基本要素となる重要なものであるとの認識を生徒・教職員で共有し、登下校だけでなく学校生活全体を通してあいさつを習慣化するとともに、地域においてもあいさつができる態度を身に付ける。（まずは、教師が生徒や来校者に積極的にあいさつをする）
- ④ 学級活動、道徳等において、ジェンダーや多様性について考える機会を計画的に設けることにより、性別、国籍、能力等による不必要な区別を学校生活からなくし、一人一人を一個の人間として尊重する態度を養う。
- ⑤ 委員会活動、学級活動等において、SDGsの取り組みを推進するとともに、生徒一人一人が自分の生活をSDGsの視点から見直し、現代の社会にあったよりよい生き方について考え、実践していこうとする態度を身に付ける。また、こうした取組を通して、今日的で世界的な課題への関心を育て、これからの社会を担っていく一員であるという自覚を醸成する。

（2）誰一人取りこぼさない生徒指導・生徒支援

- ① 日頃から、声かけやコミュニケーションを大切にし、一人一人の生徒の状況の観察や把握を丁寧に行い、生徒が発する兆候を見逃さないようする。また、定期的なアンケート調査やQ U調査等を生かし、生徒の実態把握を補完する。さらに、教職員間で日常的に情報交換を行うことで、不登校や学校不適応、いじめ等の未然防止、早期発見・早期対応を心がける。問題発生時は、的確な情報収集により、最善の方法を考え、組織的かつ迅速な対応を図る。
- ② 生徒はすべて発達の途上であること、また一人一人が成長や発達の速度が異なることを

常に念頭に置き、生徒に寄り添う態度で接することを大切にする。その際、性急に答えを求めたり結論を急いだりせず、生徒自身が自己決定できるように、支援者的、伴走者的立場を心がける。（自己決定を促す三つの言葉、「どうしたの」、「どうしたいの」、「先生には何ができる」を大切に）

- ③ 生徒一人一人が自己肯定感や所属感が感じられるような学級集団づくりを行う。そのために、一人一人に適切な役割と支援・評価を行い、一人一人が学校を自分の居場所として感じられるようにする。また、学校に来られなかったり所属学級に入れなかったりする生徒の居場所として、「ほっとスペースこすもす」の効果的な運用を進める。
- ④ 特別支援学級をはじめ通常学級にいる支援を必要とする生徒、生徒指導上の課題を抱える生徒の状況を校内支援部会、生徒指導部会で定期的に把握、情報共有し、適切な改善及び支援の方策を講じる。その過程においては、保護者との連携を図り、必要に応じてＳＣやＳＳＷといった専門スタッフに適切に関わってもらう。
- ⑤ ユニバーサルデザインの考え方にに基づき、生徒が生活しやすく学習しやすい教室環境づくり、言語環境づくりを進める。

(3) 望ましい人間関係の形成

- ① 良好な人間関係を作っていくためには、自分の気持ちをわかりやすく伝えるとともに相手の気持ちを言葉や態度から受け取って返していくコミュニケーション力が必要であることから、朝の会や帰りの会等の学級活動の時間を利用して、お互いの考えを伝え合い聞き合う場面を計画的継続的に設ける。
- ② 学級活動や委員会活動、部活動等において、自分たちの活動を振り返り、課題を見つけ、その改善の方法を考え、実行する過程を大切にする中で、自分たちの生活を自分たちの手でよりよいものにしていくとする態度（自治の力）を身に付ける。
- ③ 学級活動や生徒会活動、学校行事等を通して、生徒の居場所づくりや絆づくりに努め、自己肯定感を涵養するとともに、その取り組みを通してお互いの良さを見つけたり認め合えたりするようにする。
- ④ 職場体験学習等の啓発的体験活動の充実を図るとともに、学級活動を中心にして、「キャリア・パスポート」を活用して、生徒一人一人の社会的・職業的自立のために必要な基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）の育成を図る。また、各教科、各行事においても、これらの能力の育成を念頭に置き、授業展開や取り組みの過程において、学校で学ぶことと社会のつながりを意識できるようにする。
- ⑤ ＱＵの結果を分析し、親和的な学級集団づくりに効果的に活用する。

(4) 生徒を主体とした授業づくりの推進

- ① 年度始めや単元の始めに、生徒に身に付けさせたい資質や能力（評価の視点）を生徒に伝えることにより、生徒一人一人が目的意識をもち、主体的に学習に臨む態度を身に付けさせるとともに、透明性のある評価に資するようにする。
- ② 授業場面や評価問題の中に、自らの考えを記述する内容を計画的に取り入れることにより、自分の考えを整理し、まとめる力を身に付ける。
- ③ 単元の過程に問題解決的な学習を計画的に位置づけ、生徒同士や生徒と教師による対話機会を積み重ねることで、一人一人が考えを広げ深められるようにする。
- ④ 学習課題の選択・決定、学習方法の選択・決定、振り返り場面を設定することにより、学習への主体的な態度を育成する。
- ⑤ 各教科において、ＩＣＴを効果的に利用することにより、学習意欲及び学習効率の向上を図る。

(5) 健康・安全教育の充実

- ① 健康3原則(栄養、睡眠、運動)を推進し、望ましい生活習慣を確立させるとともに、日頃から自分自身の心身に関心を持ち、健康な状態を保つために自分でできることを実践する態度を身に付ける。
- ② 体育的行事や部活動等を通して、体力の向上を図るとともに、最後までやり抜く粘り強くしなやかな心を育てる。
- ③ 避難訓練等を通じて、自助・共助の精神を涵養するとともに、日頃から安全について考え、災害時に適切に判断し行動できる実践的な能力や態度を育てる。
- ④ 学校施設・設備の点検を確実にを行うとともに、教職員・生徒とも整理整頓を励行し、安全な生活環境の保持に努める。また、絶えず危機管理マニュアル等の見直しを行い、安全で安心な学校づくりに取り組む

(6) 地域・保護者とともにつくる学校

- ① 「社会でよりよく生きていくための資質や能力、態度を育てる」という目的を、学校と保護者が共有し、子どもを育てるパートナーとして、信頼・協力関係を構築し、学校、家庭がそれぞれの役割を果たす中で、一人一人の子どもが全人的な発達を遂げられるようにする。そのために、たよりやホームページ、連絡網等を活用し、学校の考えや生徒の様子を積極的に発信し保護者の学校への理解を深めるとともに、保護者の考えを聞く機会を計画的に設け学校教育に生かしていく。
- ② PDCAによる学校評価を生かした教育活動の組織的・継続的な学校改善に努めるとともに、学校運営協議会制度（コミュニティスクール）の効果的な運用を進める。
- ③ 「地域の子どもは地域で育てる」という考えに立ち、地域の方に学校の教育活動を理解してもらうための方策を講じるとともに、地域の方に学校の支援(地域の方が学校に入る、子どもたちが地域に出て行く)をしてもらうための体制づくりを行う。
- ④ 今あるつながりを生かし、学校ボランティアとして、出前講座や奉仕的な作業に、保護者や地域の方に参加してもらうことを積極的に進めていく。同時に、地域の一員として、生徒が地域に貢献できる活動や地域の方と共同して取り組んで行く活動を考え、実施していく。

(7) 働きたいと思える職場づくり

- ① ウェルビーイングの考えに基づき、一人一人の職員が働きたい（働きやすく、働きがいもある）と思える学校づくりを職員全体で進めていく。
- ② 学校は子どもの学びの場であると同時に、「大人同士の学び合いの場」とあるという認識に立ち、学校を職員一人一人にとって心理的な安全性が感じられる職場風土を醸成していく。そのためには、職員一人一人が職場風土を作る当事者としての意識を持ち、普段からのコミュニケーションを大切にする。（特にリーダー的な立場やベテランの職員が率先して取り組む）
- ③ 管理職は適切な校務分掌配置を工夫するとともに、学校運営委員の協力を得て、業務等の集中や偏りにより過剰負担となっている職員がいないかを把握し、必要に応じて、年度途中であっても校務分掌の見直しについて検討する。
- ④ 時間外勤務を縮小し過重労働を避けるため、学校行事や生徒会活動等、諸活動の目的を明確化、焦点化するとともに、取組方法等の工夫改善を常に心がけ、取組時間の縮減と教育効果の両立を図れるようにする。
- ⑤ 計画的な年休取得を職場として進めるとともに、職員一人一人がそれぞれ異なる家庭環境や家族状況を抱えているとの前提に立ち、お互いに休みやすい職場風土を醸成する。
- ⑥ 一人一人の職員が働き方改革の当事者としての意識を持ち、常に自分の働き方を振り返り、個人としてできる小さな業務改善に取り組む。

1 全体評価

(文章中 A:とてもそう思う B:思う C:あまりそう思わない D:思わない E:わからない)

・教師自己評価

今年度も昨年度に続き、AB評価双方を合わせると肯定的評価の項目が多い結果であった。

I. 学校教育目標 II. 学校経営・組織, III. 学習指導, IV. 生徒指導でも, AB評価双方を合わせると90%を超える高い数値が見られ, 職員の教育活動への取り組む意識の高さがみられた。ただしA評価の数値が減少している。若手教職員が増え, 自己評価を厳しくしていることや, 職員の欠員による仕事量の増加も1つの要因かと考えられる。

昨年度課題であった「地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っている」C評価が26.5%であったのが、本年度CD評価あわせて11.7%、ABでは88.2%まで回復された。これは、職場体験や家庭科の授業等における創意工夫に加え、コミュニティスクールの活性化を基盤とした「学校応援団」との有機的な連携が、教育活動の充実を支える実働組織として機能した成果であると考えられる。

・生徒アンケート

全体としてAB評価を合わせると80~90%と良好な結果であった。中でも「清掃活動がしっかりできていますか」の項目ではAB評価合わせて99.5%という大変高い結果が表れた。また昨年度もよい結果が表れた「困ったことがあったら、相談ができる先生がいますか」の項目は今回も77.2%と前回より上昇している。教師と生徒が同じ目標に向かって共に学び、行動すること(師弟同行)や、生徒に寄り添った指導を組織的・継続的に行い、生徒が自己有用感や充実感・成就感を味わえるような集団づくりに努めたことがこのような結果につながったといえる。

・保護者アンケート

全体としてAB評価を合わせると80~90%と良好な結果であった。中でも昨年度同様である項目「授業参観や学校開放日などは、子どもの様子を知るよい機会になっている」はAB評価合わせて93.3%(昨年度92.1%)と大変高い結果であった。そのような学校の様子を広く知って頂くような行事を仕組んだことが全体的にAB評価を上昇する結果につながったと考えられる。

良好の結果とは言えないが、項目「お子さんのことで、相談できる先生はいるか」はA評価が昨年度より上昇し、年々少しずつ改善している。(R4:56.8% R5:59.3% R6:62.9% R7:69.1%) CD評価も減少している。(R4:33.9% R5:33.4% R6:30.3% R7:19.3%)これも上記内容の結果(上記生徒アンケートも含む)でもあると感じる。

2 項目ごとの評価結果(達成状況・改善策)

I 学校教育目標に関して

達成状況

5項目中、3項目でAB評価が100%という高い結果となった。昨年度同様「PDCAサイクルを生かした教育活動を行っている」が今回も同じような97%(昨年度98%)であった。また生徒アンケート項目「学校が楽しいですか」ではAB評価が93.9%、保護者アンケート項目「学校は楽しいところだと思う」ではAB評価が80.6%と高い評価であり、学校に対し生徒・保護者ともに好印象であると伺える。

教員数が十分に確保できない中でも、学校教育目標の実現を目指し、協働して日々の教育活動を推進してきたことを示すものといえる。これからも学校教育目標の具現化に向けて、協力体制を取りながら、子どもを中心に据えた教育活動に取り組んでいく。

改善策	<p>本年度新たな質問項目「職場の福利厚生や健康管理について配慮がなされている」では CD 評価を合わせると 14.7%であった。特に「健康管理」について職員が無理をしていることが伺える。その為、業務改善・多忙化への取組として、仕事の分散、ムダやムラ、ムリの是正、職員の意識改革等を積極的に行っていく。</p> <p>項目「家で学校の話をしてしますか」では、生徒 AB 評価 80.7%、CD 評価 19.2%、保護者 AB 評価 71.5%、CD 評価 28.1%であった。生徒より保護者の評価が低い。生徒が家庭で学校での様子をあまり話さないこと（中学生という時期的なことも含む）が評価の低さに繋がっていると感じる。</p> <p>学校側で出来ること（「たより」やホームページ、さくら連絡網等で、学校の様子を知らせる）や学校行事、PTA 活動の充実、授業参観の工夫や改善等を行いながら少しでも学校の様子や生徒の励む姿を知らせられるよう努力していく。</p>
II 学校経営・組織について	
達成状況	<p>8項目中5項目で AB 評価が 90%以上である。職務について職員一人ひとりが責任感をもって協働体制をとりながら、取り組んでいる。昨年度課題であった「特別支援教育の体制が整い機能的に行われようとしている。」も 90%が AB 評価、C 評価（そう思わない）が 5.9（昨年度 11%）と、かなり改善された様子である。特別支援コーディネーターを中心として、多くの職員が関わりながら特別支援学級の生徒たちを取り残さない組織体制づくりを進めてきた結果だと感じる。</p>
改善策	<p>項目「校内研究（研修）に主体的に関わっている」では C 評価が 11.8%という結果が表れた。ICT を有効活用し、全職員が取り組みやすい内容ではあったが、意識の低さが表れている。校内研究への参加体制や研究会自体の見直しを行っていく。</p>
III 学習指導について	
達成状況	<p>10項目中4項目で AB 評価が 90%以上となった。学びの意欲を喚起させ、基礎基本の定着を図り、個別最適な学びと協働的な学びの実現に迫った学習指導を展開している。</p> <p>しかし、昨年度すべての項目で A（とてもそう思う）評価が 10 ポイント以上アップしたが、本年度は新しく設定した項目以外、全て昨年度より A 評価はダウンし、改善の方向を探っていきたい。</p>
改善策	<p>項目「宿題や家庭学習に対する指導を行っている」においては AB 評価 76.4%（昨年度 93.3%）、CD 評価 23.5%（昨年度 6.7%）という結果が表れた。特定の技能教科においては、若干難しい項目ではあるが、全体的にみても低く、昨年度よりもかなり下がった項目である。学級・学年として家庭学習（自主学習）の意義や取組方法の工夫、教科担当として宿題の出し方や方法等の工夫を行い改善していく。</p> <p>保護者アンケート項目「学校は一人一人の学力向上に力を入れて取り組んでいるか」では AB 評価 63.7%（昨年度 81.6）CD 評価 17.5%（昨年度 10.9%）E 評価 18.8%（昨年度 7.4%）という大変低い結果である。校内研等を利用し情報収集や課題把握、問題解決等を全職員で徹底し、改善できる環境を整えていく。今後も PDCA サイクルを繰り返し行っていく。</p>
IV 生徒指導について	
達成状況	<p>6項目すべてが AB 評価 90%以上となった。特に「生徒理解のためにコミュニケーションを図っている。」では AB 評価合わせて 100%である。生徒指導主事をリーダーとし、きめ細かな指導や支援、生徒との人間関係ができていていると感じる。これからも生徒指導の未然防止や早期発見、対応、また不登校、いじめ、支援に関わる本校のシステムの見直しを一層進めていく。生徒の抱える課題に対して共通認識をし、組織的かつ迅速、適切な対応ができるようにする。</p>
改善	<p>生徒・保護者アンケート項目「将来の夢や希望を持っているか」では生徒 AB 評価 68.8%（昨年度 69.1%）、CD 評価 31.2（昨年度 30.9%）、保護者 AB 評価 58.5%（昨年度 58.3）、CD</p>

策	<p>評価 30%(昨年度 31.3) E 評価 11.5%(昨年度 10.4%)という低い結果である。キャリア教育の目的を全職員で再度共通理解し、改善・取組の工夫を行う。また職場体験を最大限生かし、地域とともに歩む学校の実践にもつなげていきたい。</p> <p>生徒・保護者アンケート項目「SNSトラブルに巻き込まれたことがあるか」で「ある」と回答した生徒が 3.3%(12名)、保護者から 5.2%(17名)が確認された。日常生活において生徒指導や各担任による危険防止や対応、年1回の防犯講話等、行っているが、実際に巻き込まれている生徒が10名以上存在している。この件は学校だけでの対応は難しく、保護者への協力が必須である。防犯講話を保護者にも聴講できるようにする等、保護者へのSNSに対する学習の場を提供しながら協力を求めて、家庭と連携しながら生徒を守る活動を行っている。</p>
V 地域との連携について	
達成状況	<p>6項目中5項目でAB評価が90%以上であった。昨年度同様、項目「学校の教育活動について、たよりやホームページを通して保護者や地域に広報している。」はAB評価で100%である。「たより」や「HP」、また「さくら連絡網」等を利用し、学級・学年、そして学校の様子をきめ細かくスピーディーにお知らせしていることが要因であると考えられる。</p> <p>課題であった「地域の人材や施設を活用し地域の教育力を生かす指導を行っている」がAB評価88.2%（昨年度70.6%）であり、少しずつ改善されてきている状況である。職場体験や家庭科での「保育実習」「赤ちゃん抱っこ体験」「着付け教室」等の活動は、本年度の大きな成果である。これらは学校応援団や地域の方の協力があったからこそ実現したものであり、活動を通じて生徒にとって地域社会がより身近なものへと変化した。コミュニティスクールが目指す「地域と共にある学校」が、これらの活動を通じて具体化したといえる。</p>
改善策	<p>今後も地域人材の活用やPTA活動については、授業参観、学校・PTA行事等の日程や内容の工夫、またコミュニティスクールとの連携を図り、より一層保護者や地域の要望に対して情報収集に努め、連携・拡充を進めていく。</p> <p>学校への理解を深めてもらうために、学校HP、各種通信等による情報発信を広く進めていく。</p>
VI 学校の特色に関して	
達成状況	<p>4項目全てがAB評価100%となった。新項目である「本校の伝統（下駄箱、姿勢の鐘）や朝読の取組を理解し、生徒が自律的に行動できるよう指導・支援している。」においては、全職員が「よさ」や「伝統」を常に意識し、一体となり指導していることが表れたと感じる。</p>
改善策	<p>生徒アンケート項目「だれとでも挨拶をしていますか」の結果をみるとAB評価は86.9%、CD評価が13.1%という結果であり、まだしっかりと指導が行き届いていない現状である。再度全職員で確認し、来年度につなげていく。また生徒会活動として、挨拶への取り組みの工夫と充実を行い支援していく。</p>

3 まとめ

<成 果>

職員一人一人が教育目標や重点目標を踏まえ協働して教育活動を推し進めていった。また ICT を活用した学習指導を展開し、「主体的・対話的で深い学び」の充実に向け、校内研において、課題設定や振り返りに着目した取組「ふたばスタイル」を新たに実施し、全ての子どもたちが誰一人として取り残されることなく充実した学びができるような研究を行い、大きな成果も表れた。

来年度も教員が十分に確保されるかは未知数であり、教員の働き方改革も考えながら学校教育目標の具現化に向けた協力体制をつくり、よりよい学校運営につなげていきたい。

<課 題>

- ・生徒と保護者のアンケート結果の隔たり

本年度、生徒と保護者の質問内容を合わせたものを作り実施した結果、いくつかの質問で隔たりが生じていることがわかった。

質問例として

生徒「先生はよく勉強を教えてくれるか」 (A:54.0% B:44.3% C:1.4% D:0.0%)

保護者「学校は一人一人の学力向上に力を入れて取り組んでいるか」

(A : 5.5% B:58.2% C:13.0% D:4.5% E:18.8%)

生徒・保護者、両者へのアプローチの仕方を再検討する必要がある。特に保護者に対して学校教育への理解を頂けるよう、関わりを深めていかなければならない。

- ・働き方改革

業務改善・多忙化への取組, 仕事の分散, ムダやムラ, ムリの是正, 職員の意識改革等を積極的に行い、職員が働きたいと思える学校づくりを進めていく。

- ・学習指導における I C T の活用

I C T の活用による教育課程の進度への不安や、苦手意識の強い職員等、若干存在する。来年度も校内研等で研鑽に努め、I C T の有効活用を進めていく。